

## ライマン雑記(13)

副見 恭子<sup>1)</sup>

### ライマンと助手たちⅡ

秋山美丸

#### 1. 北海道地質測量調査

「日本蝦夷地質要畧之図」の並列した地図製作者名をみると、先ず地質学長辺士来曼(ベンジャミン・スミス・ライマン)の名があり、次いで顯士門老(ヘンリー・スミス・マンロー)を筆頭に、14名の地質補助が続く。マンローが日本人助手たちと一緒にされたのを激怒したのは、周知の事実である。次は山内徳(徳三郎)で、実力および経験からみて当然であろう。以後、順序の基準が判りかねたが、どうやら、地質測量参加順であるらしい。しかし、秋山美丸が地質助手として3番目なのが腑に落ちず、わだかまりが残った。

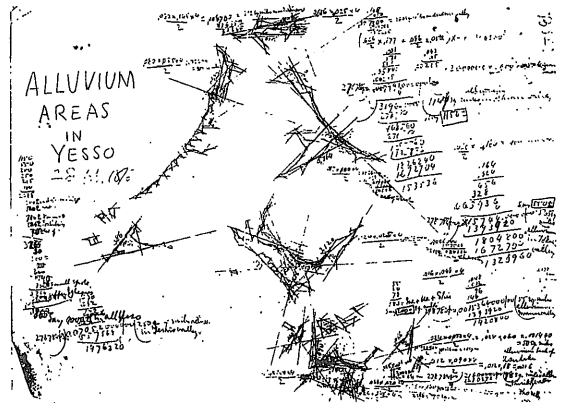
ライマンが日本で用いたフィールド・ノートブックの数は、165冊、ナンバーL3-L167で、第1冊L3の最初のページは、Apr. 23 1873 函館で始まる。第3冊目L5の7月1日に、早くも、Quarter-masterとして、秋山が登場する。職名を事務官とか会計補助助手と訳しているが、英語の宿舎の手配・糧食・運輸をつかさどる補給係将校の役目と類似しているのではなかろうか。秋山は蝦夷の知識にとみ、測量・調査を見聞かして、いち早く習得し、忙しい時は、助手の役を買って出たりしたので、ライマンの彼への信頼は、日が立つにつれ、深まって行った。

第1回北海道調査を終え、江戸に戻ると、ライマンは早速、助手たちの功績を称えた手紙を、黒田清隆へ送った。同書簡で、通訳佐藤秀頭の才能と助力をほめ、本人が望む植物学専攻の希望に応え、政府留学生として、アメリカに送るよう勧め

た。またライマンは、秋山の才幹を称賛し、彼の鉱山局への転任および地質学の受講を勧告し、彼が地質補助になるよう尽力をつくした。

秋山美丸はどんな人物だったのだろうか? 資料が少ないため、第2回北海道地質調査の折、ライマンが書いた「北海道地質検査巡回記事」に頼る外なかった。この調査旅行は、苦難の連続で、殊に上川盆地横断・北見知床硫黄山の調査・増毛山地越え等、凄絶を極めた。人間の真の姿が、辛苦を共にすると、よく判ると言われるが、ライマンが地質補助秋山を観察する眼は鋭い。[巡回記事]で事故や珍事に処する秋山の決断の早さ・勇敢な行動・アイヌたちへの思慮と親切・ルルモソベ鮭網漁見物で、土地の人々が、元知事だった彼に示した敬愛・彼の謙虚な態度等を描写し、高潔・剛毅な人と激賞している。

しかし、翌1875年、秋山は突然失脚し、ライマン



第1図 ライマン蝦夷測量ルートマップ(マサチューセッツ大学図書館蔵)。

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員:  
8 Eaton Court Amherst, MA 01002-2828 U.S.A.

キーワード: ライマン, 秋山美丸, ビューケマ

の下を去った。その原因を調査して行く中に、ライマンと開拓使の確執の驚くべき真相をつかみ、幼稚ではあるが、開拓使の狡猾手段に慄然とした。ライマンが二度と蝦夷の地を踏まなかった心情がよく解った。

## 2. ライマンの抗議 ビューケマ開拓使仮学校女教師

ライマンの第1年目、1873年は、順風満帆で、平穩に過ぎた。翌4月12日、彼は「開拓使仮学校の卒業後の奉職義務廃止献言」(注1)を黒田次官へ送り、5日後の4月17日に、「女教師ビューケマ(注2)に対する無礼及びライマンと女生徒との結婚を妨害したことにより、女学校掛福住の罷免要請」(注3)の第2弾を放った。これがライマンと開拓使の葛藤の発端である。

先ず、「女教師ビューケマに対する無礼」から取り上げよう。「開拓使外国人関係書簡目録」(注4)よりこの事件に関する主な書簡を最小限に選択し、リストを作った。

ビューケマ夫人(旧姓 ツワートル)とデロイテルは、オランダ人で開拓使仮学校女教師、そしてライマンの友達であり、ボードウインはオランダ領事で、デロイテルの伯父なのを承知の上で、読んでいた。月日(1874)・書簡内容・差出人・宛名の順である。

1. 4月10日 ビューケマ夫人(ツワートル)解雇の件につき抗議 ボードウイン 黒田
2. 4月17日 女教師ビューケマに対する無礼及びライマンと女生徒との結婚を妨害したため、女学校掛福住の罷免要請 ライマン 黒田
3. 4月17日 ビューケマの件はボードウインへ照会のこと、またライマン結婚問題については福住妨害の証拠提出要請 黒田 ライマン
4. 4月18日 女生徒に授業をボイコットさせた福住のビューケマに対する辞任強要について ライマン ケプロン (開拓使顧問)
5. 4月19日 福住につき調査の結果勤勉適格の通知 黒田 ケプロン
6. 4月19日 福住のビューケマに対する無礼につき再審要請 ライマン 黒田
7. 4月20日 ビューケマ夫人解雇の撤回要請 ボードウイン 黒田

8. 4月24日 ライマンの福住に対する非難に根拠なし 黒田 ケプロン

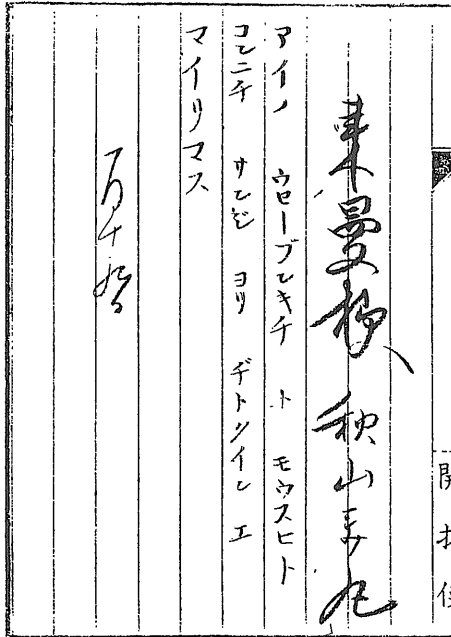
9. 5月3日 福住に対するライマンの罷免要求撤回に満足 黒田 ケプロン

10. ビューケマ夫人の件、解決を喜ぶ  
ボードウイン 黒田

4月の初め、開拓使仮学校の年内札幌移転が、しきりにうわさされた。4月11日、女生徒たちが、突然クラスをボイコットした。彼女たちは、女学校も札幌へ移転するのを聞き、女学校卒業後、5年間は開拓使に従事し、北海道在籍の男性とでなければ婚姻できず、退学の場合は、多額な官費を返さなければならぬ苛酷な校則を身近に感じ、動転し、ボイコットをしたのであろうか? 黒田は、10日に、ビューケマの開拓使女生徒たちのボイコット中止催促、続いて12日、ライマンの開拓使仮学校生徒奉職義務廃止献言の各手紙を受け取っている。これら3通に、何か目に見えない繋がりがあるのではなからうか。一旦、ビューケマ事件は、円満に解決したかのようにみえた。しかし、この事件は、どんでん返しとなり、開拓使の陰謀が、次第に明らかとなって行く。目録の引用を続ける。

11. 6月11日 女学校の裁縫授業廃止通知 調所(開拓使官吏) ビューケマ/デロイテル
12. 6月20日 女教師に過重労働を強いる授業内容変更反対 ボードウイン 黒田
13. 7月27日 毎日6時間英語授業の困難さにつき弁論 ボードウイン 西村(開拓使官吏)
14. 9月7日 11月1日をもってビューケマ夫人仮学校退職申し出 ボードウイン 黒田
15. 9月25日 開拓使の意向によりビューケマ夫人10月1日をもって退職了承 ボードウイン 黒田
16. 9月30日 ビューケマの退職承諾並びに贈物進呈 黒田 ビューケマ
17. 12月9日 デロイテル解雇条件の合意書 調所 ボードウイン
18. 12月20日 開拓使福住によるデロイテル家財競売妨害につき代価請求 ボードウイン 西村

一目瞭然ビューケマとデロイテル追い出しの策略は、6ヵ月余りで、見事成就した。



第2図 秋山美丸のメッセージ(フィラデルフィア自然科学院蔵).

### 3. ライマンの抗議 広瀬常

ライマンと女生徒との結婚妨害事件については、森本貞子女史著「女の海溝・トネ・ミルンの青春」(注5)が、大へん参考になった。1874年正月に行われた開拓使主催の新年祝賀パーティで、ライマンと外務大丞森有礼が、外国人接待を務めた開拓使女学校生徒の一人、才色兼備な広瀬常を同時に見初めた。どちらが彼女を娶とるかが、事件の核心となる。これは、赤子の腕をねじる如しで、開拓使の意のまゝに動いた。黒田と森の関係は、同じ政治的な野心を抱く薩摩隼人であり、1871年、黒田が開拓使に外国人を雇用する目的で渡米した時、ワシントン駐在少弁務使森に世話になっている。

膨大なライマンコレクションから、広瀬常に関する資料を捜しだすのは至難の業だった。唯一通、しかもほんの一文に、ヤングレディとして、ライマン書簡に残っていた。福住妨害の証拠を出せと要求した黒田へのライマンの4月17日の返事で「結婚申し込みの妨害は、デリケートな本質から、これが証拠と指摘することはできない。ヤングレディは、福住の妨害すら全く気がついていないのではないだろうか」と述べている。ヤングレディの語を見るや、思わず、我が目を疑った。19世紀の紳士教育の下

に育ったライマンには、これだけ書くのが、精一杯の抗議であったろう。彼の胸中を察すると、痛ましく思う。ライマンは、証拠を指摘できず、福住罷免要請を却下した。北海道在籍者でなければ、開拓使仮学校女生徒と結婚できないため、彼は「婚姻特別願」を開拓使へ提出したが、福住は、以後梨の礫にし、ライマンがやがてはあきらめるのを待つ戦術をとったと思われる。

4月17日、荒井郁之助と福住の件で会った後、ライマンは、通訳佐藤秀顕にも手紙を書いた。彼は、佐藤が自分をだましたのでなく、開拓使の言う通りに通訳していたに過ぎなかったことが判ったと、個人的な問題に骨折ってくれたお礼として、時計を贈った。福住の妨害の証拠と断言できよう。手紙の末尾に、「開拓使改善に全力を尽す決心をした。もし尚も、黒田が不正な開拓使の役人に牛耳られるなら、彼の解任勧告さえ辞さない」と彼の意気込みを示した。正に、ニューイングランド人の発想であるが、日本では通用できないのみか、後日、佐藤が開拓使側に回った時、この記述がライマンに不利となった。

翌年2月6日 森有礼と広瀬常は、福沢諭吉を証人として、当時珍しい新型契約結婚式をあげた。余談であるが、後、森は常を離婚し、岩倉具視の娘と結婚した。常の狂死は事実であろうか？

### 4. ライマンの抗議 監督権

前述の出来事と秋山を巻き込んだ事件とは、本質的に全く違う。監督権の問題を中心にした事件だが、開拓使の役人たちは、ライマンの行動力を恐れた。彼は、単なる地質学者でなく、大きな構想の下に、仕事を進めようとする合理主義者だった。日本近代国家発展に欠くことができない石炭の発見・採掘はもとより、石炭輸送のための道路・港湾・鉄道の建設、そして労働力・経済政策と着想を広げ、やがては、開拓使の怠慢・無能・浪費・非近代的運営等、行政の深部に踏み込んでしまった。役人は、ライマンに刃をあてられた恐怖を感じ、自衛のため、団結して立ち上った。

監督権問題が生じた根室事件は、「ライマン雑記(10)」で詳しく述べた。通訳佐藤秀顕を用済みとして、マンロー隊へ送ろうとした折、開拓使が、ライマンに監督権はないと、松本大判官の手紙を持た

6月20日に、彼の最後の第3回北海道地質調査が始まった。重視した煤田調査計画が無視され、突如、鉄道建設調査の命を受けたり、北海道地質地図製作のため、製図室を要請すると、豚小屋の様な部屋を提供されたり等、多くの屈辱を受けた。その中で、最もライマンの心を痛めたのは、秋山の左遷であった。

12月4日、ライマン開拓使辞任の際、黒田長官より、賞詞と岩に孔雀の置物および茶道具を贈られたが、断固受け取りを拒絶した。12月10日、再度固辞した記録が残っている。

### 5. ライマンの嘆願

1876年、ライマンは内務省に移り、越後油田調査チームを組むため、開拓使の助手たちを引き抜いたが、秋山だけに待ったがかかった。

4月30日、彼の上司、勸業寮工学頭兼製作頭大鳥圭介が江戸に戻ったのを聞き、秋山の転任許可が下りよう説得してもらいたいと、個人的な嘆願書をしたためた。草稿は8ページの長文で、心を揺さぶる。次の部分は、書簡のクライマックスと言えよう。

Mr.秋山を石油採掘の担任に推せんしたMr.河瀬(秀治 内務省勸業寮内務大丞)宛の手紙をごらんになったと思います。Mr.山内(徳三郎?)によると、内務省は、Mr.秋山の転任を申し入れたのですが、開拓使は、彼が蝦夷で専横な振る舞いをしたとの理由で許可しません。さて、その理由をもうご存じと思いますが、全くの口実で、明白に私に対しての怨恨なのです。暴力行為とは、案内人某(1874年目的の宿が廃業していたため、宿探しをした時の案内人 筆者註)が彼と私をひどく侮辱したので、秋山はかっとなって彼を一殴りました。それも私が一寸座を外した時に起りました。些細な事件だったので、数ヵ月後に聞くまでは、そのような事が起ったのでさえ、知りませんでした。私は暴力が正しいと言うつもりはありません。彼も興奮が冷めたら、後悔したことでしょう。ほんの小さな出来事でした。叱責で十分だったので。しかるに、1年以上、薄給の3分の1を減俸するのは、あまりにひどい処罰です。

いや、彼に対する当面の固執が、私が最初から

明治七年八月十二日於札幌  
呈ライマン氏貴下  
貴下近頃日本語ヲ学ヒ得ラレ将来ノ巡視ニ譯官ヲ要セサルヲ以 譯官左藤生ハ「モンロー」氏江同行スヘキ旨 再三被申聞候趣 既ニ同生到着ノ上具状セリ 然ルニ第一同生ハ貴下ノ辨官而已ニ無之 政府ニおゐて貴下ノ辨説ヲ明知センカ爲黒田次官ヨリ同行ヲ命シタル主意 宜ク知アラン事ヲ希望ス

開拓大判官松本十郎

第3図 明治7年8月12日付開拓使大判官松本十郎書簡原文(フィラデルフィア自然科学院蔵)。

せ、佐藤を根室へ送り返した事件である。2通の松本書簡、即ち、原文と和文が存在し、陰謀をにおわせる。「ライマン雑記(10)」を書いた時は、原文をみていなかったが、その後、藤田文子教授から原文のコピーをいただいた。「雑記(10)」に掲載した和文と比べると、大へん興味深い。内容はともかくとして、文体は殆ど異なる。

明治七年八月十二日於札幌 呈ライマン氏貴下  
貴下近頃日本語ヲ学ヒ得ラレ将来ノ巡視ニ譯官ヲ要セサルヲ以 譯官左藤生ハ「モンロー」氏江同行スヘキ旨 再三被申聞候趣 既ニ同生到着ノ上具状セリ 然ルニ第一同生ハ貴下ノ辨官而已ニ無之 政府ニおゐて貴下ノ辨説ヲ明知センカ爲黒田次官ヨリ同行ヲ命シタル主意 宜ク知アラン事ヲ希望ス

開拓大判官 松本十郎

ライマンは、自分に助手たちの監督権ありと主張を続け、3ヵ月後に監督権を黒田から得て、一応問題が解決したように思われた。しかるに、1875年初頭、秋山の物産局への転任、ライマンを通さず、開拓使の補助手への命令と、次ぎ次ぎに約束は反故となっていく。ライマンは窮地へ追い込まれ、3月27日、辞表を提出した。

危惧していたことの証しになります。つまり、大へん卑劣な、愚かな方法で、私に対する恨みを彼に負わせ、スケープゴートにしたのです。彼は地質助手だったのに、苦情の手紙に、オフィスの助手を奪われたと書いた為、彼は犠牲になったのです。私の苦情で、彼とは何ら関わりありません、開拓使は、私の苦情が正しいのを認めるべきでした。これが、開拓使のため精根尽して働いた返礼でした。我々の地質調査の価値に甚だ無知なのに免じて、地図と報文を完成するため、無報酬で2ヵ月ばかり遅くまで働きました。勿論、私自身もこの仕事に関心がありますが、主に、政府や開拓使にとって非常に重要なので始めました。蝦夷埋蔵石炭概算量約1億5千万トン、私の見解で、政府に年収百万ドルをもたらすと示した手紙を、多分見られたことでしょう。その後、2、3倍の量とわかり、概算1日1万ドル、私の見積りの10分の1、1日千ドルとして公表しますが、こうした努力のお返しに、開拓使は、私の弱い友達、唯、彼が私の友達だとの理由で、彼をひどく傷付け、卑劣な手段で私を苦しめます。

一途で強い正義感に溢れるライマンの義憤が、文面に迸る。彼はまた、これまでに開拓使の愚行を暴露しなかったのを悔い、また、開拓使に蝦夷の巨大な富を任せたままにしてよいのだろうか、独立行政機関として、維持を続けて行けるのだろうかと疑問を投じた。

2日後、即ち、5月2日に、内務卿大久保利通が、秋山転勤願いを開拓使へ再度依頼するのを拒否した通知を大鳥圭介から受け取った。その返事で、「自分が思っていたように、内務卿は、開拓使の固陋と悔悟の念がないのを感じされ、決断されたのだろう」とすでに出处進退を決めていたせい、穏やかに述べている。次いで、大鳥が内務省勸業寮の油田調査地質学長として、自分を斡旋した厚意を深く謝し、今となつては、辞する外はないと、彼に解任を乞うた。「秋山は政府に忠実であったにかゝらず、私との交友で苦しまなければならなかった。他の理由は考えられない。私の開拓使の批判や意見が、彼の影響を受けたと思われたのだ。こゝに居座れば、同じような疑いが地位ある友達にもおよぶ」。手紙はなおも続き、「まだ新契約に、納得できない所が2ヵ所あるし、政府は喜んで私を

私儀前日書口達ニテは諸仕置及  
 給樹等ヲ以テ今般勸業寮試  
 験坊台會計神助手トシテ所産  
 入歳本月廿日頃信濃地方  
 本張ニ随行可仁旨ヲ示シ  
 本日海芝籍之趣ヲ示シ左  
 諸中ト也 會計神助手  
 唯性九年 五月十三日 芝原ノ秋山美丸  
 地質學士 勸業寮長  
 巴司 本島曼  
 秋山美丸

第4図 秋山美丸の勸業寮雇備受諾状(フィラデルフィア自然科学院蔵)。

解任してくれると思う。越後油田調査準備は放棄しなければならないが、ヤングマンはすでに石炭調査の経験があるので、炭田調査の仕事を与えてはどうか、そして最後に、現在やっている北海道地図と報文は仕上げるつもりだが、解任となれば、速やかに捗るだろうと手紙を終えている。ライマンの公私を判然と弁えた態度に畏敬の念を抱く。

それから10日間に、何が起つたのだろうか？ 永遠の謎であろう。5月13日付の手紙で、ライマンは、秋山美丸へ、正式に会計補手として信濃越後油田調査隊に加わるよう命じた。給料は1日1円、それに旅費が支給されると告げ、勸業寮の規則によって、受諾状を要求した。万感の思いを殺し、一片の感情すらない公文書である。

誰が秋山の内務省入りを許可したのであろうか？ 大久保利通は、内務省で、ライマン採用検討中に、黒田清隆から「動スレバ我意ヲ張り不遜ノ所業不少ニ付、必向來不都合ヲ生シ可申」の注意書を受け取ったが、内務省は、独断を選んだ。黒田の妻女斬殺事件で、大久保がとった処置が、黒田への誼みでなく、彼の広い政治的視野でなされたとしたら、この大逆転は、内務卿の最後の決断だっ

たと信じたい。

5月11日、大蔵大輔松方正義が、勸業寮権頭河瀬秀治の職を引き継ぎ、兼任した。翌12日、彼は、「河瀬と貴下と結約した件につき、相談したい」との手紙をライマンへ送った。松方との交渉が成立し、晴れて、越後油田調査の第一歩が、6月にスタートすることになった。付け加えると、5月30日、黒田長官代理中判官西村貞陽が、北海道報文と地図製作の仕事の賞与として、ライマンへ8百円送ったが、お金は送り返された。

## 6. 地質補助秋山美丸

蝦夷を離れ、信濃越後油田調査に参加した秋山は、陸に上った河童同様、彼の特色を発揮することが出来なかった。同僚の会計補助手の前田本方は、すでに、前年大鳥圭介や山内徳三郎と石油調査の旅をしたベテランであったし、ライマンの地質助手たちとは、年令・教育・仕事で一線を画していた、なかんづく、思考に大差があった。秋山は、「ライマン先生」とか外国人だとの意識が薄く、信頼と尊敬できる人には、ベストを尽し、不合理なルールは無視する型破りな人物だった。だからこそ、ライマンとの友情が芽生え、上川盆地横断で開花したのだ。1879年工部省を去る前に、大鳥に秋山の行く先を頼んだ。帰国後、明治の女性に珍らしく、のびのびした、解放的なミセス・秋山と文通し、秋山の動向を知るのを楽しんだ。秋山は、最後に、山口で貿易の仕事に携わり、1886年病没した。

1876年5月、「日本蝦夷地質畧之図」が完成した。

1週間前に、ライマンが大鳥に解任を求めた事実から判断し、帰国を決心したライマンが、彼への「はなむけ」として、山内徳三郎の次に地質助手秋山美丸の名を記入したのだと思えてならない。

注1) 3-4) 開拓使外国人関係書簡目録：(1983)、北海道大学附属図書館編 発行 224 p 12-13, 75-76, 102-116.

注2) Bèukema, I.Ch.

## 参 考

鈴木尉元・小玉喜三郎(1990)：ライマン・コレクションを訪ねて。地質ニュース, no.427, 49-53.

副見恭子(1990)：ライマン雑記。地質ニュース, no.427, 54-57.

副見恭子(1990)：ライマン雑記2。地質ニュース, no.433, 40-42.

副見恭子(1990)：ライマン・コレクションとの出会い。地質ニュース no.433, 43-44.

副見恭子(1990)：ライマン雑記3。地質ニュース, no.434, 44-46.

副見恭子(1990)：ライマン雑記4。地質ニュース, no.436, 60-64.

副見恭子(1991)：ライマン雑記5。地質ニュース, no.444, 57-59.

副見恭子(1992)：ライマン雑記6。地質ニュース, no.451, 57-60.

副見恭子(1992)：ライマン雑記7。地質ニュース, no.453, 55-60.

副見恭子(1992)：ライマン雑記8。地質ニュース, no.459, 56-60.

副見恭子(1993)：ライマン雑記9。地質ニュース, no.471, 55-64.

副見恭子(1994)：ライマン雑記10。地質ニュース, no.476, 45-53.

副見恭子(1995)：ライマン雑記11。地質ニュース, no.486, 56-66.

副見恭子(1996)：ライマン雑記12。地質ニュース, no.505, 46-51.

FUKUMI Yasuko (1997) : A note on Lyman (13) - Lyman and his assistants II.

<受付：1997年4月1日>